

トマト

産地の特徴

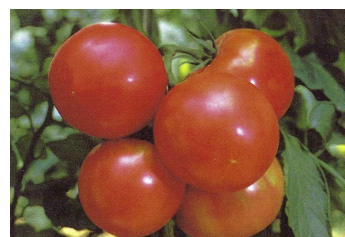
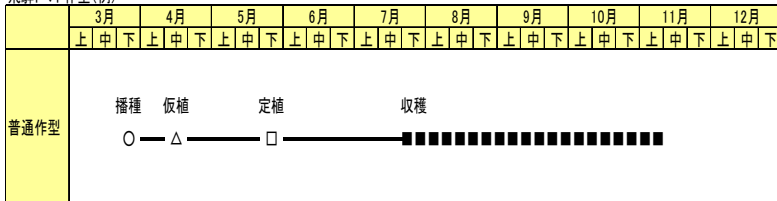
高冷地の自然条件を活かした雨除け施設栽培により、飛騨トマト 114 ヘクトールが栽培され7月から11月まで出荷が行われている。栽培体系の統一と共同選果場の設置により品質の向上と均一化を図り、京阪神市場を中心に中京市場、京浜市場へ出荷され、飛騨地域全域での共同販売・共同計算を行っている。

また、安全で安心なトマト栽培への取り組みとして、ビニールハウスの周囲に防虫ネットを張り農薬の散布回数を減らすとともに、有機質肥料を使用して栽培している。

令和6年4月1日以降飛騨野菜出荷組合の独自基準「ひだクリーン栽培基準」により、減化学肥料・減農薬に取り組んでいる。また、近年の気温の上昇に対応するため、慣行品種の「桃太郎」から、皮が強く棚持ちする「麗月」に移行した。これにより、高温期の着果が良好になり、裂果の発生も大きく減少した。今後はより高度な GAP(農業生産工程管理)に取り組み、更なる安全・安心な生産に努めていく。

飛騨トマトの栽培体系

飛騨トマト作型(例)



年産別トマトの生産推移

